生涯学習基盤経営研究 第 42 号 2017 年度

〈老い〉をめぐる学びに関する考察

松本奈々子[†]

[†]東京大学大学院教育学研究科

本論は，教育実践研究において，超高齢社会の高齢者や高齢期を社会保障政策で提示される「新しい高齢者像」とは異なる〈老い〉を，若者が創造／想像する論理の存立基盤を構想することを目的とする。本論では，移りゆく高齢者・高齢期の加齢現象を「老いること」，その表象を〈老い〉と呼ぶ。本論で取り組んだ課題は以下の通りである。第一に，「老いること」をめぐる教育実践研究と社会保障政策との関係を検討する。第二に，一つ目の課題で見えてきた傾向を老年社会学の理論の〈老い〉の議論を参照して《「高齢者神話」の論理》として認識する。第三に，批判的老年社会学の著書『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』から高齢者の〈ケア〉の〈場〉の相互作用の過程で生成される〈老い〉という視点を参照したうえで，若者が〈老い〉を語る〈場〉を教育実践研究で検討する可能性を示す。以上をふまえて，本論の最後に，〈老い〉をめぐる学びの課題と展望を述べる。

キーワード：〈老い〉，「老いること」，ケア，《「高齢者神話」の論理》，老年社会学

目 次

1 はじめに

1.1 課題意識
1.2 目的と課題設定
1.3 用語の整理

2 先行研究の整理

2.1 高齢者を対象とする教育の研究
2.1.1 高齢者教育
2.1.2 教育老年学
2.2 高齢者・高齢期についての教育の研究
2.2.1 看護教育
2.2.2 学校教育
2.3 小括

3 老年社会学と〈老い〉

3.1 前史：ジェロントロジー
3.2 老年社会学
3.2.1 第 1 期（1950~1960s）の研究
3.2.2 第 2 期（1970~1990s）の研究
3.2.3 《「高齢者神話」の論理》
3.3 批判的老年社会学（2000~）
3.4 教育実践研究において語られてこなかった〈老い〉

4〈老い〉をめぐる学びの構想

4.1 「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」について
4.2 〈老い〉と“応答可能性としての主体”
4.2.1〈ケア〉の〈場〉
4.2.2〈ケア〉の〈場〉における〈老い〉の問題性
4.2.3〈ケア〉の〈場〉の可能性と“応答可能性としての主体”
4.2.4〈老い〉の問題性とケアサービス
4.3 〈老い〉をめぐる学びの構想に向けて

5 おわりに

1 はじめに

1.1 課題意識

今日の日本は超高齢社会であり，二つの特徴的な人口動態上の変動に直面している。

第一に，人口の少子高齢化に伴う，高齢者人口比率の増大である。日本は，高齢化社会と称され

てからわずか30年程で高齢化率が21%を超える超高齢社会へと急速に変容を遂げた。高齢者人口は,団塊の世代が65歳以上となった2015年以降も上昇を続け『平成29年度版 高齢社会白書』によると，日本の総人口1億2,693万人のうち高齢者が総人口に占める割合（高齢化率）は27.3%となった[1]。高齢者の人口比率が増加している一方，出生率は減り，日本の人口は減少の傾向にある[2]。

第二に，個人の加齢現象の長期化すなわち，高齢期の延長である。1970 年当時の平均寿命は，男性 69.31 歳，女性 74.66 歳であったが，2017 年の簡易生命表によると男性は 80.98 年，女性は 87.14 年となった[3]。医学が発達し，生活水準が平均的に豊かになったことによって退職や子育てを終えた高齢者は退職後も何十年と生きることができるようになったのである[4]。寿命が延びたことを契機に，居住地や属性によって違いはあるものの，社会参加を望む高齢者が増加の傾向にある[5]。寝たきりや要介護の期間の長期化すなわち，平均寿命と健康寿命の格差という現状が課題とされている[6]。

超高齢社会において，高齢者や高齢期はこれまでにない新しい現象として立ち現れ，それに対応するために，高齢者や高齢期を取り巻く制度の整備・意識の改革が要請されている。国内の高齢社会政策において最も注目を集めているのは社会保障制度の改革である。なぜならば，高齢者に対する社会保障すなわち，年金・老人医療・介護に対する公費が国の支出の大部分を占め，そのうち４割強は国債で賄われているからである。厚生労働省は，社会保障の制度を税制度と共に改正し，年金・医療・介護に加えて子育てに対する支援を行う制度を確立することを提案している[7]。

2000 年に施行された介護保険制度の導入は，老人医療・介護のあり方に大きな変革をもたらした。介護保険制度は三つの基本的な考え方に基づいている。まず，高齢者は老人医療・介護のサービスを自分で選ぶこと，そして自立した生活を送ることができるように支援すること，さらに，給付と負担の関係を明確にしたこと，である[8]。そこでは，高齢者が住み慣れた地域で自立した生活を営むための「地域包括ケアシステム」が目指された。「地域包括ケアシステム」は，ケアのあり方を，自助・互助・共助・公助の四つに分け，そのうち互助の占める割合を重要視している。すなわち，自ら対応できない部分に関して，費用負担が介護保険や医療保険制度において保障されていないボランティア活動や地域住民の取り組みを支援すること（互助）が，保険金の給付（共助）や自治体のサービスの提供（公助）に増して重要視されているのである。2015 年度の介護保険制度の改正は，介護予防・生活支援事業を「総合事業」として制度化し，支援事業の具体的な計画や運営は自治体が担うこととなった。そして，既存の介護施設だけではない地域の多様な人的社会的資源を用いることを可能とした[9]。

以上に述べた社会保障制度の改革は，高齢者や高齢期への意識の改革の必要性も同時に提示している。2000 年以降の高齢者政策において，一貫して前提とされてきたのはこれまでの高齢者とは異なる高齢者の生き方を自ら開拓していく「新しい高齢者像」であった。

高齢者政策における「新しい高齢者像」は社会に参加し，積極的な役割を果たすことを推奨しているといえる。例えば，介護保険制度が実施された 2000 年の厚生白書の第一部は,“新しい高齢者像のために”という題目であり，白書全体を通して団塊の世代が高齢期になる“高齢者の世紀”に向けて，“高齢者をめぐる問題を様々な観点から考察し，新しい高齢者像にふさわしい社会保障システムの創造に向けた議論の素材を提供”することを目的としている。ここにおける，「新しい高齢者像」とは,従来のように弱者としてではなく，多様な生き方を営む個人として捉えられている[10]。さらに，1999 年のゴールドプラン 21 は，高齢者保健福祉施策の新たな段階の到来を見据えて具体的な数値を提示しながら策定された，介護サービス基盤の整備を含む総合的なプランである。その基本的な目標の第一が“活力ある高齢者像の構築”であり，“明るく活力ある社会を築き上げていく”ために，“高齢者が，社会において積極的な役割を果たしていくこと”が鍵であると認識されている。“できる限り多くの高齢者が健康で生きがいをもって社会参加できるよう総合的に支援し，「活力ある高齢者像」を社会全体で構築していくことを目指す”とする[11]。

上記の新しい高齢者への意識改革を促す政策において着目されている，「高齢者の社会参加」に関する研究を概観すると，政策の理念を引き継ぐ傾向がみられる。2000 年以降の研究は，高齢者の社会参加が QOL や地域福祉に良い影響をもたらすことを前提とした上で，社会参加を促進す

るための議論が蓄積されている。上記の政策や研究は，超高齢社会において高齢者が社会に参加する意義を介護予防・生活支援の実践の観点から述べている。すなわち，要介護からの復帰を目指す高齢者のリハビリや要介護認定されていない高齢者に対する介護予防を地域コミュニティにおいて自足すること，そのために，高齢者自身が地域社会に参加し，地域福祉のありかたをつくることが公的な役割として重要視されているのである。

ところで，意識の改革にかかわる，教育実践の場に目を移すと，高齢者・高齢期についての研究は，高齢者教育や介護や看護の専門職に対する教育において多く蓄積されているが，専門職ではない一般教育を対象とした研究が体系化されていない。超高齢社会に生きる高齢者・高齢期というテーマを扱う教育研究が福祉や介護に携わる人や事象を主に扱ってきたという事実は，それらの研究が先述した社会保障政策の論理と親和的であることを示している。

前述のとおり，現代の超高齢社会の特徴は，高齢者人口の増大及び個人の加齢現象の長期化である。これは，介護保険制度に関わる高齢者・介護関係者だけではなく，全ての人々にとっていずれ訪れる高齢者・高齢期というテーマが他人事でなくなったという現実を示している。かかる現実からすれば，高齢者・高齢期と時間・空間的に乖離している若者[12]を対象とした教育実践研究も必要であり，重要である。さらに，若者は，社会保障政策の論理のもと，高齢者・高齢期というテーマを扱う教育研究から看過されてきた存在でもある。これまでの教育研究において前提とされてきた，社会保障政策の理念の根本にある高齢者・高齢期に対する意識について問い直す際に，高齢者・高齢期というテーマを扱う教育研究において語られてこなかった若者を検討する必要があると考える。

1.2 目的と課題設定

以上の課題意識をもとに，本論は，教育実践研究において超高齢社会の高齢者や高齢期について，社会保障政策で提示される「新しい高齢者像」とは異なる〈老い〉を，若者が創造／想像する論理の存立基盤を構想することを目的とする。

そこで，本論は三つの課題を設定する。第一に，高齢者・高齢期についての教育実践研究を整理し，社会保障政策との関係を明晰にすることである。ここでは，教育実践研究から若者が断絶されてきたことを確認する。第二に，社会保障政策で提示される「新しい高齢者像」と老年社会学の理論を接続する。第三に，批判的老年社会学の文脈に位置づく『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』から高齢者・高齢期に対する認識が高齢者の〈ケア〉の〈場〉の相互作用の過程で生成されるという視点を参照し，若者が時間的にも空間的にも離れている高齢者・高齢期について語ることで〈老い〉を創造／想像する論理の存立基盤を構想し，今後の〈老い〉をめぐる学びの展望につなげることである。

以上をふまえて，本論文は，超高齢社会を生きる高齢者をめぐる教育実践研究の新たな側面を照らす「〈老い〉をめぐる学び」を構想する。それは，今後の継続的な研究の基礎となる考察として位置付けることができると考える。

1.3 用語の整理

日本の省庁の統計は，65 歳以上を高齢者とみなし，高齢期と呼ばれる人生の後半期の節目の年としている。65 歳という年に説得力を与えてきたのは，退職と年金受給開始の年齢が 65 歳であることである。さらに，同じ時期に家庭から子どもが独立し，家庭内の構造も変化するとされてきた。寿命が 70~80 歳であったとき，高齢期は勤労・育児後の余生を過ごす時間として捉えられてきた。しかし，高齢期が長期化している超高齢社会において，身体のままならなさと向き合いながらも，持ち前の能力を生かして前期・後期高齢期をどのように生きるかということが模索されながら実践されている[13]。そのため，超高齢社会における高齢期という新たな現象は今まさに経験されていて，それをめぐる表象が政策・研究・文学において生成されているといえる。

本論では，高齢期を経験する個人を高齢者と呼び，このように時代と共に変遷してきた高齢者の加齢現象を「老いること」，そして加齢現象の表象を〈老い〉と呼ぶ。

前節の冒頭に設定した本論の目的を以上の用語を用いて換言すると以下のようになる。すなわち，本論の目的は，教育実践研究において，超高齢社会で新たに経験されている「老いること」という現象に対して，社会保障政策の論理に包囲されてきた〈老い〉とは異なる論理で，若者が「老

いること」を語り〈老い〉を創造／想像するための基盤を構想することである。

2 先行研究の整理

本章では，高齢者が高齢者・高齢期について学ぶための教育（高齢者を対象とする教育）と高齢者以外の年齢層が高齢者・高齢期について学ぶための教育（高齢者・高齢期についての教育）の二つを「老いること」をめぐる教育実践としたうえで，それぞれの先行研究を整理する。そして，高齢社会政策との関係を示す。整理する対象は高齢者教育の制度化が行政的に位置付けられた1960~70年代以降から2017年現在までの高齢者教育，専門職教育（看護教育），専門職ではない若者を対象とする教育（学校教育）とする。

2.1 高齢者を対象とする教育の研究

2.1.1 高齢者教育

高齢者教育は1965~70年にかけて行政的に位置付けられ，理論化が行われるようになったのは，1970年代以降である。高齢者教育の理論は，①高齢者教育の実践の報告，②高齢者現状の分析とそこから析出された問題への対処といった実践論が蓄積されてきた。高齢者教育の実践は1963年に制定された老人福祉法に裏付けられた老人クラブをその前身としているため，その研究は福祉的観点から学習の機会を高齢者に施すという視点が強かった[14]。

その後，1980年代の社会―経済政策の影響のもと，高齢者教育研究は人材活用や介護予防という目的と重ねて語られるようになった。高齢者・高齢期の多様な生き方を肯定的に認識し，それを地域活動や就業といった社会参加を通して自ら作っていくための主体形成を目標に推進されている[15]。

2.1.2 教育老年学

教育老年学とは，堀薫夫が1970年以降アメリカ・イギリスで展開されてきたEducational Gerontologyを参照した“エイジングと生涯教育・成人教育を対話”させる試みである。堀は，福祉とは独立した教育の視点から，高齢者独自の学習・教育に関する理論を開拓している[16]。

堀は，社会保障政策の論理から独立した理論を目指している。しかし，教育老年学は，超高齢社会という現代日本の高齢者をとりまく文脈をどうとらえるかという点，すなわち，高齢者自身の学びが社会や周辺の人々にいかに関連付けられるのか，という点を看過している。そのため，社会参加に関しても，介護予防という福祉の文脈は介入させないものの，高齢者自身にどのような変化がもたらされたのかという点に収斂している[17]。教育老年学に通底している，高齢者自身の学びを社会や周辺の人々にとってどのように位置づけるのかという点を避ける論理は，高齢者を社会から引退しているとし，彼らに保護や施しを与えることを目的とする高齢者福祉の高齢者観と軌を一にするといえる。

2.2 高齢者･高齢期についての教育の研究

2.2.1 看護教育

2000年以降は，高齢者関連の専門職として看護教育の研究が開拓されている。老人看護教育は1989年に看護教育のカリキュラムが改定された機会に創設された。その後1997年にカリキュラムの改正が行われ，在宅看護論と精神看護論の二本立てで老年看護学として独立した。老年看護教育に関する研究に関して，実践のための技能や態度を培うための研究が行われている。そこにおいて高齢者・高齢期についての教育として，認知症の高齢者に対するイメージ，さらに看護を行う際の高齢者とのコミュニケーションや関わり方についての研究が蓄積されている[18]。

2.2.2 学校教育

高齢者や専門職などの社会福祉の実践を目的とするのではない学びの機会は多様にあるが，ここでは若者に対して最も体系化・組織化されている教育実践として，学校教育の研究を検討する。

このうち，学校教育を包括的に概観したものとして，中村清の学習指導要領と教科書を検討した論考が挙げられる。1996年に小中学校と高等学校の普通科の学習指導要領と教科書で扱われる高齢化社会を検討し，社会福祉や思いやりという言葉で高齢社会の課題が矮小化され，他人事として取り上げられていることを指摘している[19]。しかし，この研究以降の学習指導要領の改訂を反映させた学校教育のカリキュラムを，包括的に検討している研究はみられない。

学習指導要領の改訂以降に蓄積されているのは，個々の授業実践を検討する研究である。キャ

リア教育の視点から高校生の「正しい」高齢者理解を促す教育老年学の授業の実践を試みている研究[20]，エイジングの視点を国語の教科学習に埋め込んだ授業研究[21]，公民教育的な視点でエイジング教育を学校で確立させようとしている授業研究[22]がある。すなわち，学習指導要領改訂後の学校教育研究は，個別の実践研究が蓄積されているが，高齢者・高齢期について学ぶ教育実践の理論的体系化は未だ開拓されていないといえる。

2.3 小括

先行研究から，「老いること」をめぐる教育実践の研究に関して以下の特徴があるといえる。第一に，高齢者を対象とする教育と専門職教育の研究が大半を占め，それらは介護と介護予防の論理で意義付けられていることである。第二に，学校教育において，高齢者に関する教育研究が体系化されてこないことである。

以上から，教育実践研究は，「老いること」を介護や福祉を専門としない若者には関係のない現象として認識しているといえる。この事実は「老いること」をめぐる教育実践研究が，介護と介護予防を目指す社会保障政策の論理に基づいて「老いること」を捉えていることを示す。なぜならば，高齢者と介護従事者が「老いること」という現象を担うという構図は上に示した教育実践研究の構図と重なるといえるからである。

2000 年以降の社会保障政策は，高齢者を介護の受け手として介護従事者に全てを委ねるか，あるいは自らの不断の努力でいきがいをつくり，課題に自ら対処していく地域福祉の担い手として捉えている。すなわち，「老いること」は新しい高齢者像を担う高齢者あるいは介護従事者が自ら責任をもって対処する課題として認識されているのである。つまり，介護や福祉を専門としない若者を対象とする学校教育の研究が「老いること」を学習者にとって重要な課題として認識してこなかったのは，「老いること」にまつわる課題を高齢者や介護従事者が自ら解決するという社会保障政策の論理で認識してきたからであると考える。

そこで，本論は，高齢者や介護従事者だけではなく，高齢者や介護に直接関わりを持たない人や場においても，「老いること」を語る可能性を示すことを試みる。その際に，まず，上記の社会保障政策の論理を理解した上で，高齢期や高齢者をそれとは異なる論理で語る方途を検討する必要がある。次章以降は，高齢者の加齢現象を「高齢者神話」とは異なる文脈で語ることを基軸に理論を蓄積してきた老年社会学の議論を時代的に把握し，社会保障政策の論理を理解する。

3 老年社会学と〈老い〉

3.1 前史：ジェロントロジー

1950 年代のジェロントロジー[23]設立初期は，退職後の高齢者は社会的役割から引退するものであるがゆえに，社会的に援助をするべきという観点から認識されてきた。これが後の老年社会学者が「高齢者神話」[24]と指摘した〈老い〉である。高齢者に対するこの認識は生物学や医学からの影響を受けていた。この時期の医学技術の進展は，病気を患い障害をもつ高齢者の状況を明らかにし，その変化を人間の心身機能の退行や能力の喪失ととらえていたのである。初期の老人福祉や 1970 年代の高齢者教育は，「老いること」をこの「高齢者神話」の〈老い〉で捉えてきた。

3.2 老年社会学

老年社会学はジェロントロジーを構成する一学問領域であり，加齢現象（エイジング現象）のメカニズムのうち，社会的エイジング（Social Aging）に重点をおいて捉えてきた[25]。後に「高齢者神話」という高齢者観を媒介に，その対象と方法を変遷してきた老年社会学は，ジェロントロジーの加齢認識に大きな影響を与え続けてきた。

老年社会学の理論は大きく 3 つの時期区分に分けることができる。第 1 期は 1950~1960 年代，老年学と老年社会学の黎明期である。第 2 期は，1970~1990 年代，老年社会学の展開期である。そして 2000 年以降現在まで続く第 3 期は，それ以前の議論を捉え返しながら記述的な研究を蓄積してきた。

3.2.1 第 1 期（1950~1960s）の研究

老年社会学は社会的エイジング，すなわち社会的意識や仕組みがもたらす影響に着目して高齢者の役割喪失を認識し，解決する試みとして始まった。その背景には，喪失の原因を生物学や医学の言説を規範とする老人差別に対する対抗という意図があった[26]。老年社会学は「社会的な」意味連関が，高齢者の健康の促進・阻害をもたらす

要因として機能していることを指摘したことにより，高齢者の健康が何かという議論に大きな影響を与える位置付けとなった。

初期の老年社会学は構造主義的社会学に影響を受けた離脱理論[27]や活動理論[28]の両輪で高齢者の役割論が進められた。個人の加齢現象は理論の提示する構造に基づいて機能主義的な理解がなされた。

この時期の老年社会学は高齢者を社会から離脱した存在として認識した離脱理論に対抗するという社会運動的な意図も含まれていたため，「社会に参加すること」を条件とする理論が生まれ，後の理論に影響を及ぼした。Robert Havighurst は「社会に参加すること」という点において，活動理論と離脱理論は対立関係にあるのではないと述べ，その方法をその二つの理論の間で戦略的に選択することでサクセスフル・エイジングの実現が可能であると述べた。サクセスフル・エイジングとは，個人が加齢現象に直面しながらもうまく年をとることを指す。この概念は老年学・老年社会学が達成するべき規範的な概念である[29]。

3.2.2 第 2 期（1970~1990s）の研究

1970 年代以降の老年社会学の研究は，離脱理論や活動理論という機能主義社会学の枠組みの限界を感知し，老年社会学研究をより個人の適応過程に照準して研究するようになった。第一に，画一的な高齢者という集団の構造への適応不適応ではなく，個々人のライフコース上でパーソナリティや資源を用いて社会の意識や仕組みと適応していく過程を考察する人間発達論的アプローチを取り入れるようになった。そして社会的エイジングは個々人の役割適応の問題としてではなく，個々人と社会の意識や仕組みへの社会化の問題として扱われるようになった[30]。第二に，激動する社会における多様な生き方や家族集団内に限定しない高齢者のあり方がライフサイクルの段階設定の限界を照射したことで個々のライフサイクルの豊穣化とライフコース論への移行が進んだ[31]。そのため，この時期の研究は，高齢者個々人の多様な生き方に照準し，それぞれを肯定的に捉えていた。

さらに，1980 年代の研究はサクセスフル・エイジングの再燃をもたらした。そしてそのきっかけとなった John Rowe と Robert Kahn の論考は，これまでの高齢者観は今では通用しない“神話”であると述べ，打破するべきであると述べた[32]。サクセスフル・エイジングは，そこで打破したのちに目指すべき指針として提唱されたのである。さらに，サクセスフル・エイジングはノーマル・エイジングとよぶ「普通に」年齢を重ねることで経験する，病気や障害という形ではない身体や認知の機能の衰えに対してよりよく年齢を重ねる経験を指した。とりわけ重要視されたのが，「社会に参加すること」であり，サクセスフル・エイジングが重視する三つの要素のうちの一つとされた[33]。

この「高齢者神話」は福祉国家の制度が女性を弱者として囲い込んできたと主張するフェミニストたちに開拓されてきた。1980 年代のサクセスフル・エイジングは，高齢者自身の適応という側面だけではなく，社会制度への異議申し立てという側面があるとされている。サクセスフル・エイジングの派生としてアメリカの老年学者 Robert Butler によって 1980 年代に提唱された概念である，プロダクティブ・エイジングはその結びつきを強調した。プロダクティブ・エイジングは「社会に参加すること」の内容を，よりモノやサービスの生産へと焦点を絞った。具体的には，退職や育児を終えた高齢者が有給の仕事やボランティア活動に従事することで，家族を支え，自律と自立を維持する能力がある状態を表す。このころの老年社会学の「社会に参加すること」という要素には倫理的な意義主張をするという意図がみられる[34]。

3.2.3 《「高齢者神話」の論理》

第 1 期，第 2 期の老年社会学研究は，「老いること」のうち，自立して社会に参加・適応する能力のメカニズムを検証しその意義を論じてきた。そしてその根底には，社会で自立する能力を失い，他者に依存する者として高齢者を認識してきた，「高齢者神話」と呼ばれる〈老い〉への反発があった。また，日本の社会保障政策の指針として提示された「新しい高齢者像」は，高齢者に対して，介護予防を推進し，そして地域・福祉の担い手になることを期待している。老年社会学のこれらの研究の蓄積はこの「新しい高齢者像」という〈老い〉を裏付けてきたといえる。この老年社会学が裏付けてきた，弱い高齢者像を規定してきた「高齢者神話」の〈老い〉を脱し，新しい高齢者の生

き方を構想するために，自立した高齢者像としての〈老い〉を提示する論理を《「高齢者神話」の論理》と呼ぶ。

2000 年以降の批判的老年社会学は，これまでの老年社会学の論理構造《「高齢者神話」の論理》を批判的にみて，その下で語られてこなかった現象を探求してきた。そのひとつに，「新しい高齢者像」や自立した高齢者という認識への批判がある。

3.3 批判的老年社会学（2000~）

2000 年代から現在に至る第 3 期の老年社会学は，老年学や老年社会学の論理で語られてこなかった高齢者の生き方があることを問題視し，それ以前の社会的な加齢の構築性を懐疑するようになった。フェミニズムや社会構築主義，批判主義，ポストモダニズムの研究者は，ジェンダーや人種，貧困といった社会的な格差の議論と老年社会学の議論を接続させ，社会的エイジングとそれを構築してきた社会，そして老年社会学の語り方自体を個々の研究の方法論と理論に基づいて問い直している[35]。

近年の日本で批判的老年社会学を展開する代表的な論者として，小倉康嗣と天田城介が挙げられる。両者は自身の設定した課題にあった対象の記述を通して，老年社会学の批判を乗り越えようとしている。小倉は，近代産業社会を課題として認識している。そこで，産業社会の想定する頂点からの離脱すなわち退職後の男性のライフヒストリーを記述し，その解釈から，近代産業社会という全体的な社会概念を軸に問い返しつつ高齢社会を構想している[36]。天田の課題意識は，「老いること」の表象，つまり〈老い〉にある。高齢社会において新たな現象として立ち現れてきた「老いること」を自立した個々人が無限に作り続けることを推奨する「新しい高齢者像」という表象で回収するメカニズムを批判する。なぜならば，それができない個人や「新しい高齢者像」という表象が想定しない現実を捨象しながら語り続けるということで，表象されえないものに対する抑圧状況が生まれるからである。天田は，高齢者と彼らをケアする従事者の関係を，介護する―されるという非対称の関係ではなく，“応答可能性としての主体”同士の関係としてとらえる。そして，日常的なケアの実践において生起する〈老い〉を記述することで，「高齢者神話」や「新しい高齢者像」とは異なる論理で「老いること」を語ることを試みる[37]。

3.4 教育実践研究において語られてこなかった〈老い〉

本論は，はじめにで述べた通り，「老いること」をめぐる教育実践研究で優位であった社会保障政策の言説の論理を懐疑し，「老いること」を語る新たな論理を検討することを試みる。その際に，《「高齢者神話」の論理》において語られない〈老い〉が現れるという批判的老年社会学が提示した構造に着目する。

老年社会学研究の提示した《「高齢者神話」の論理》は，本論が冒頭で提示した問題意識，すなわち，教育実践研究において若者が〈老い〉を語ることを重要視してこなかったという構造の根底にある。すなわち，《「高齢者神話」の論理》が通底している社会保障政策において，「老いること」は，高齢者が自ら解決する現象あるいは，介護従事者の課題として認識されてきた。そこにおいて，介護を受ける高齢者―介護を施す従事者の関係において生起する〈老い〉や高齢者とは直接関係をもたない若者が「老いること」を語り，〈老い〉を創造／想像する〈場〉を捨象してきたのである。

本論の目的は，教育実践研究で若者が〈老い〉を創造／想像する可能性を示し，〈老い〉をめぐる学びを構想することである。天田は後に紹介する著作において，介護従事者がこれまで語りえなかった〈老い〉を生み出してきた構造を分析し，それを語る可能性について〈ケアサービス〉の実践と社会学の理論の立場から述べた。そこで，次章は，語られてこなかった〈老い〉の問題性に取り組んできた天田の議論をふまえて，まず，『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』(2010) における“応答可能性としての主体”を軸に〈ケア〉の〈場〉における〈老い〉を語る視点を引用する。そして，学習者である若者が「老いること」を語ることで〈老い〉を創造／想像する可能性を考察する。

4 〈老い〉をめぐる学びの構想

本章は，高齢者・介護専門職・研究者に限らず，あらゆる人が「老いること」について語り，〈老い〉を創造／想像するという一連の認識過程を「〈老い〉をめぐる学び」と呼び，これまでの老

年社会学と『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』[38]の議論をふまえつつ，その存立基盤を構想する。

4.1「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」について

〈老い衰えゆくこと〉とは，老年期における個人の身体のままならなさを第一義的に意味する現象である[39]。「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」とは，天田が著作で構想している老年社会学の方法論であり，《「高齢者神話」の論理》を乗り越えてその弱さやままならなさを語る可能性を示している。

「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」の構想の根底には，「老いること」を語る老年学・老年社会学の言説における〈老い〉が現実の「老いること」に対して抑圧的に働いているという課題意識がある[40]。天田は，老年学の理論に対して，以下の2 点を指摘している[41]。第一に，高齢者が社会から引退するという視点に反発する運動的な傾向が強かったこと。第二に，そのなかで，個々人の多様な〈老い〉を肯定する言説が強調・称揚されていること。そして，これらの理論のなかで，高齢者自らが自らの役割を調整／構築していく高齢者像としての〈老い〉が描出されるようになったと述べる。そこで望まれたのは，自立した高齢者であり，前人未踏の超高齢社会という現象を目前に新たに経験されている「老いること」を経験する高齢者が〈老い〉を自ら作り続けることであった。

この老年社会学の示す規範が通底したことにより，「老いること」をめぐって経験される高齢者の呆けや老衰，死，さらにそれに対応する介護関係者の苦労といった側面を排除してきたと述べる[42]。そのメカニズムとは以下に示される。第一に，自立した高齢者という規範が通底することで，その規範外にある，要介護や認知症といった余儀なく依存しなければならない状況からは遠ざかりたいという意思が生まれる。そして，その否定するもの（スティグマ）を自らの中に発見し，それから遠ざかるように〈老い〉を生成しつづける。さらに，このメカニズムは，もし誰かに依存して生きざるをえなくなる状態に陥った場合に，その状態を絶望的であると当事者に感受するように要請することになる。このメカニズムのもと，〈ケア〉の〈場〉において経験されている「老いること」を老年学が語ってこなかったと述べる。「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」はこの〈ケア〉の〈場〉の困難を含めてなお語ることの可能性を提示しているのである。

4.2〈老い〉と“応答可能性としての主体”

天田は，自立していない，すなわち「新しい高齢者像」たりえない高齢者や彼らを支える介護従事者が試行錯誤を繰り返すなかで生成される〈老い〉を社会学の立場から記述した。本節は，天田の理論が「老いること」を語る〈場〉として照準した〈ケア〉の〈場〉を検討する。

4.2.1〈ケア〉の〈場〉

まず，〈ケア〉という行為は 〈ケア〉をする相手の個々の性格などの個別性をふまえて自発的に気遣いをする，気にかける関係性に入ることを意味する[43]。天田は高齢者や高齢期の〈ケア〉を検討している。そして〈ケア〉の〈場〉といった際の〈場〉とは，社会学的な知を展開する理論の場であり且つ日常世界においても問いが生まれる実践の場でもある[44]。そこにおいて，高齢者や介護従事者は「老いること」に内在する弱さや苦労を日常生活において相互に感受している。〈ケア〉の〈場〉は，その弱さや苦労を誰がどのように引き受けるかを相互に問わざるをえない状況である。この〈ケア〉の実践での駆け引きと相即的な関係において〈老い〉は立ち現れる[45]。

4.2.2〈ケア〉の〈場〉における〈老い〉の問題性

高齢者の〈ケア〉の〈場〉において，介護を受ける高齢者は，自らの身に起こった出来事を語ることが困難な状況にあることが多い。そして，介護従事者は，高齢者の経験した出来事をできるだけ個人や社会で通底している規範の範囲内で語ろうとする。こうして，高齢者やケア従事者が高齢者の〈ケア〉の〈場〉において経験している「老いること」の表象として語られる〈老い〉は，そこにおける困難を排除するという意味で抑圧的に作用するといえる。この〈場〉において，「新しい高齢者像」という〈老い〉のもつ規範で自立した主体同士の関係が前提とされたとき，個人や社会で通底している規範や意味の秩序から逸脱している呆けや老衰，死といった出来事を語ることを牽制し合うこととなる。この〈ケア〉の〈場〉における困難を語ることができないという状況が天田の指摘した〈老い〉の問題性である[46]。

4.2.3〈ケア〉の〈場〉の可能性と“応答可能性としての主体”

天田が選択した高齢者の〈ケア〉の〈場〉は，〈老い〉の問題性が過剰に感受されている〈場〉である。そしてその〈場〉が困難に溢れているが故に，困難を排除しながら試行錯誤をくりかえす自立した主体同士の関係ではなく，困難に向き合う“応答可能性としての主体”[47]同士の関係を結ぶことによって，その困難をふまえた〈老い〉を相互に作り変える実践や理論となりうると天田は述べる。

“応答可能性としての主体”とは，語られてこなかったという事実が提示する困難に対して語ろうとする行為や態度をもち，〈老い〉の問題性に向き合うことを自ら欲望して引き受ける主体のあり方を指す。“応答可能性としての主体”同士の関係において，〈老い〉とはどうあるべきという規範によってそれぞれの位置が確定されるのではなく，〈老い〉の問題性を出発点に，「老いること」をどう語ることができるのかということを相互に模索しながら〈老い〉が生成される。そのため，〈老い〉の規範や意味の秩序から逸脱した，わかりえない他者を排除し，特定の規範としての〈老い〉に回収して語ることはない。〈老い〉とはどうあるべきという規範を措定せずに，他者との相互行為のなかで，それも他者の〈老い〉によって自らの〈老い〉が変容していく過程が，〈老い〉の創造／想像の過程なのである。〈ケア〉の〈場〉の〈老い〉は，それを語る主体が“応答可能性としての主体”同士の関係にはいることで，抑圧的に働いてきた《「高齢者神話」の論理》の秩序と，弱さや苦労といった排除されてきた「老いること」を含めて作り替えられていくものとしてとらえられる。

さらに，直接介護実践の相互作用とは関わりがない社会学者が記述する〈場〉もこの“応答可能性としての主体”という概念によって担保される。老年社会学が介護や福祉に孕む〈老い〉の困難を語ってこなかったという問題性に対する応答として，困難を含めた〈老い〉を社会学者が記述することは，〈場〉における相互関係を成立させる。

4.2.4〈老い〉の問題性とケアサービス

天田は「ケアサービス」という概念に接触している〈ケア〉の〈場〉を選択することで，社会学という立場を保ちつつ， 2000 年以降の介護制度実施以降の〈ケア〉の外在化とそこであらわれた新しい〈ケア〉のあり方の模索という現代日本社会の直面する課題とも絡めて「老いること」の困難を認識し，語ることを可能にしている[48]。

「ケアサービス」は，2000 年の介護保険制度施行にともない，従来家族でまかなっていた〈ケア〉を社会に外在化した，〈ケア〉の実践のひとつである。この「ケアサービス」をどう捉え，それをどのように利用するかを考える際に，これまでだれがどのように〈ケア〉してきて，これからどのように〈ケア〉していくのか，という問いが生起する。そして「ケアサービス」はこの問いを，家族内だけではなく社会に向けて投げかけ，「老いること」に対する〈ケア〉，そしてそこでめざす〈老い〉のありかたを考える新たな〈場〉である。

例えば，これまで伝統的に高齢者のケアは，親密な関係にある家族が快く引き受けること，そして高齢者はそれに対して全てを委ねることが是とされてきた。しかし，天田が指摘しているのは，ここにおける親密さゆえに〈老い〉と〈ケア〉の場で感受している困難を語ることが許されなかったこと，そして，それを外部化することが許されなかったことという問題性である。この問題性を受け入れたうえで，家族を問い直し，新たな〈老い〉と〈ケア〉の可能性を語るか，それとも語らずに家族で「老いること」に対する〈ケア〉を担保しつづけるかという選択は〈ケア〉の実践においても，社会学の理論においても，超高齢社会における〈老い〉に関わる今日的な課題として認識されているのであり，それゆえに，新たな〈ケア〉の〈場〉としての可能性を示しているのである。

4.3〈老い〉をめぐる学びの構想に向けて

既述のとおり，教育実践研究において〈老い〉は《「高齢者神話」の論理》で構成されてきた。そのため，まず介護予防や介護実践を目的とした教育実践研究が蓄積されてきた。さらに介護で目指された「新しい高齢者像」は高齢者の自立を促したため，〈老い〉は自立した高齢者の実践で切り開かれるものとされてきた。そのため，自立していない高齢者や介護従事者，若者から断絶してきた。これまで整理してきた天田の議論では，高齢者や介護従事者の「老いること」をめぐる経験において語られてこなかった困難も含めて〈老い〉が生成される方法について述べてきた。本論

の最後に，冒頭の目的に立ち返り，高齢者や介護従事者とは時間や空間を隔てた若者が，〈ケア〉の〈場〉において「老いること」を語ることの可能性を，上記の天田の論を参照しながら示唆し，〈老い〉をめぐる学びの展望を述べる。

天田の提示した高齢者の〈ケア〉の〈場〉は，お互いが気づかう立場にありながら，いかによく「老いること」を実現することができるか，どのような〈老い〉を目指すかを問いつつそれを創造する理論的・実践的な基盤である。天田は，〈ケア〉の実践と理論の〈場〉において，高齢者の〈ケア〉をどのように実践していくかという問いに向き合い，実践する関係において，「老いること」の困難を含めた語りとして〈老い〉を生成する可能性を述べた。天田の考察は〈ケア〉の〈場〉で「老いること」の困難を日常的に感受している「ケアサービス利用者」を対象にしていた。天田が提示した〈ケア〉の〈場〉における〈老い〉の生成には，〈ケア〉の〈場〉で「老いること」を問うという関係に入ることが条件である。

それゆえに，高齢者の〈ケア〉の場と離れている若者が，その関係に入るためには，まず若者が〈ケア〉の〈場〉における〈老い〉の問題性に向き合うことが求められる。すなわち，実践の根底にある理念や目的が〈老い〉の問題性を生み出してきたことを指摘してきたという本論の指摘をふまえると，高齢者の〈ケア〉をだれがどのように実践するかを問う際に，そこで語られる〈老い〉とは何かという問いに取り組むことが求められてくるのである。その段階を経て若者が〈老い〉を創造／想像することができると考える。

〈ケア〉の〈場〉において問われてきたのは，家族でまかなっていた〈ケア〉の実践の外在化に伴って，これまでの〈ケア〉を継承しつつ，新たな〈ケア〉のあり方を創造／想像しなければならないという理論的・実践的課題である。そこで若者が〈ケア〉の〈場〉で「老いること」を問うという関係に入ることは，〈ケア〉の〈場〉で若者がこれまでの〈老い〉を継承しつつ，将来の展望としての〈老い〉を創造／想像する可能性を示しているともいえる。この若者も含めた一連の認識過程は，〈老い〉をめぐる学びとして展望することができると考える。

5 おわりに

本論は，〈老い〉をめぐる学びの理論と方法論を構築する過程に位置付けられる基礎的考察である。〈老い〉をめぐる学びとは，「老いること」について語ることを軸に〈老い〉とそれをめぐる〈ケア〉の関係を創造／想像するための思考・実践の過程である。以下，冒頭に設定した課題を振り返る形で本論を整理し，今後の課題と展望を示す。

本論で設定した第一の課題は，高齢者・高齢期についての教育実践研究を整理し，社会保障政策との関係を明晰にすることであった。ここでは，高齢者教育・専門教育（看護教育）・一般教育（学校教育）の研究を検討し，「老いること」をめぐる教育実践研究において若者を対象とする研究が体系化されていないことを指摘した。そこで，「老いること」が高齢者の問題として捉えられているという点において，高齢者・高齢期についての教育実践研究への「新しい高齢者像」からの影響を指摘した。学校教育外で若者を対象とする教育実践の研究については今後検討する必要があると考えられる。

第二の課題は，「新しい高齢者像」の論理を老年社会学の理論で理解することであった。老年社会学において強い影響力を持っていた一派は「高齢者神話」への反発から，高齢者が自立し，社会に参加する〈老い〉を裏付ける理論を展開してきた。社会保障政策の提示する「新しい高齢者像」は老年社会学の理論によって裏付けられているという関係を指摘した。この論理を本論では《「高齢者神話」の論理》と呼んだ。

第三の課題は，批判的老年社会学の文脈に位置づく『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』を参照し，「老いること」をめぐる教育実践研究における〈老い〉の認識を捉え直す視点を引用することで，〈老い〉をめぐる学びを展望することであった。ここでは，若者が時間的にも空間的にも離れている高齢者・高齢期について語ることで，〈老い〉を創造／想像する，という論理の存立基盤として，天田の視点を引用した。天田は，〈ケア〉という実践と理論の〈場〉での〈老い〉の問題性を媒介とした相互作用に着目する理論を提示していることから，〈ケア〉の〈場〉で若者がこれまでの〈老い〉を継承しつつ，将来の展望としての〈老い〉を創造／想像する可能性を示した。

本論が展望した〈老い〉をめぐる学びを継続的に構想していくために，次の段階として，若者と〈ケア〉の〈場〉の関係を検討し，若者が〈ケア〉の〈場〉で「老いること」を学ぶこと，すなわち〈老い〉と〈ケア〉の創造／想像のメカニズムを理論と実践を通して検討することが求められると考える。そのため，今後の取り組む課題は，第一に，本論で扱う若者という概念を，〈ケア〉の〈場〉との関係のうちに明晰にする作業を行うこと，第二に，若者が〈老い〉と接触する教育実践を，今回扱わなかった，学校教育の学習指導要領や教科書の検討・個別の授業や体験学習の観察から蓄積することである。

注

[1] 内閣府『平成 29 年度版 高齢社会白書』入手先 URL: http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf (アクセス日: 2017-10-27)

[2] 国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集（2017 改訂版）』入手先 URL: http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2017RE.asp?chap=1&title1=%87T%81D%90l%8C%FB%82%A8%82%E6%82%D1%90l%8C%FB%91%9D%89%C1%97%A6 (アクセス日: 2017-12-14)

[3] 厚生労働省『平成 28 年簡易生命表の概況』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life16/dl/life16-15.pdf (アクセス日: 2017-12-14)

[4] 牧野篤『シニア世代の学びと社会』 勁草書房, 2009, p. 4–5.

[5] 片桐恵子『「サードエイジ」をどう生きるか』東京大学出版会, 2017, p. 28.

[6] 厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会，次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会『健康日本 21（第 2 次）の推進に関する参考資料』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_02.pdf (アクセス日: 2018-1-8)

[7] 厚生労働省『社会保障・税一体改革』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/shakaihoshou/kaikaku.html (アクセス日: 2018-1-25)

[8] 厚生労働省老健局振興課『日本の介護保険制度について』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/english/policy/care-welfare/care-welfare-elderly/dl/ltcisj_j.pdf (アクセス日: 2018-1-25)

[9] 厚生労働省老健局振興課『介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000074692.pdf (アクセス日: 2018-1-25)

[10] 厚生労働省『厚生白書（平成 12 年度版）』入手先 URL: http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/2000/ (アクセス日: 2018-1-25)

[11] 厚生労働省『ゴールドプラン 21』入手先 URL: http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1112/h1221-2_17.html (アクセス日: 2018-1-25)

[12] ここにおける「若者」は子ども・若者白書の調査対象とされた区分，すなわち 15 歳から 29 歳までの男女を想定している。
内閣府『平成 29 年度版子供・若者白書』入手先 URL: http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/pdf_index.html

[13] 関口礼子“速い日本の高齢化”<関口礼子編著『高齢化社会への意識改革』勁草書房，1996> p. 2–12.

[14] 久保田治助“1960 年代における高齢者の教育政策の創設と展開”『鹿児島大学教育学部研究紀要』vol. 65, 2013, p. 55–65.
牧野篤, *op. cit.*, 2009, p. 94–95.

[15] 辻浩, *op. cit.,* p. 13–25.

[16] 堀薫夫『教育老年学の構想』学文社, 1999.
堀薫夫『教育老年学の展開』学文社, 2006.
堀薫夫『教育老年学と高齢者学習』学文社, 2012.

[17] *Ibid.*, 2012, p. 102–134.

[18] 大渕律子“老年看護学の看護実践能力を高める教育のあり方”『三重看護学誌』vol. 11, 2009, p. 1–8.

[19] 中村清“学校は今若者に何を教えているか”<関口礼子編著, *op. cit.,* 1996> p .68–82.

[20] 下地敏洋“高校生の高齢者理解に関する一考察”『琉球大学教育学部紀要』vol. 90, no. 1, 2017, p. 213–222.

[21] 山口徹“森鴎外小説作品に描かれた「老い」の分析と現代社会における教育的活用の研究”『豊かな高齢社会の探究 調査研究報告書』vol. 18，2010，p. 1–10.

[22] 村上祐幸，川崎惣一 “エイジング教育（Education About Aging for Students: EAS）の授業化に向けて”『釧路論集 : 北海道教育大学釧路分校研究報告』vol. 42, 2010, p. 49–59.

[23] ジェロントロジーは超高齢社会の政策と加齢現象を対象とする高等教育である。超高齢社会とそこで老いることの表象を編み出し，社会に還元／循環させることを通して高齢社会を構想

する基盤として機能することを目的としている。日本では，桜美林大学と東京大学にジェントロジーの学科あるいはプログラムが設置されている。鎌田実“鎌田実教授が語る，東京大学の「未来づくり」”<東京大学高齢社会総合研究機構編著 『2030 年超高齢未来』東洋経済新報社, 2010> p. 58–67.

24 三品武男“アメリカにおける現代エイジング「問題」”<安川悦子編著『老人神話の打破』御茶の水書房, 2002> p. 117–120.
高齢者は全て「病気」「障害」「無力」「受け身」「孤独」「不幸」であるという認識は，当時エイジング研究の最先端であったアメリカで広く受け入れられていた高齢者観である。John Rowe と Robert Kahn は 1987 年の論考においてこれらは今では現実とは懸け離れた「神話」であると述べた。

25 加齢研究は，老年期に限らず，個人が経験する一生涯の加齢現象を研究対象として捉えている。主に, 生物学的エイジング（Biological Aging），心理認知的エイジング（Psychological Aging），時系列的エイジング（Chronological Aging），社会的エイジング（Social Aging）の代表的な 4 つのアプローチがある。
Hooyman, Nancy. “*The Growth of Social Gerontology*” in Hooyman, Nancy ed. *Social Gerontology*, 9th ed., USA, 2010.
大内尉義編著『新老年学』第三版，東京大学出版会, 2010.

26 安川悦子“現代エイジング研究の課題と展望”<安川悦子, *op. cit.,* 2002> p. 3–48.

27 「離脱理論」は老年期の社会的役割とその適応を初めて理論化した。1961 年に Elaine Cumming と William E. Henry の著作 *Growing Old* が出版されたことをその発端とする。その根底には，老人神話に対する一般的な言説として流通していた「活動理論」が望ましい社会的・個人的発達のモデルとして中年期の状態を考え，高齢期それ自体が中年期とは質的に異なった特性をもった発達段階であるということに考えが及ばなくなってしまうという課題意識がある。そのため，高齢者と社会が相互に撤退する過程は自然であり，不可避であると主張した。しかし，離脱理論はこれらの命題が疑いもなく真であることが経験的事実によって判定されなかったため，批判を受けた。

28 「活動理論」は「離脱理論」に対抗して，これまで「高齢者神話」に対して語られていた言説を理論化した。初期の活動理論は，高齢者の社会参加とその個人的社会的な効能に関して理論化することで，退職後も壮年期から継続して社会活動に積極的に参加し，活躍することが理想的な高齢者の生き方の条件であるとした。

29 Havigharst, R. J. “*Successful Aging*” *The Gerontologist*, vol. 1, 1961, p. 8–13.

30 Higgs, Paul and Nazroo, James. “*Social Gerontology*” in Fillit, Howard M. ed. *Textbook of Geriatric Medicine and Gerontology*, 7th ed., USA, 2010, p. 187–192.

31 *Ibid.*, p. 187–192.

32 三品武男“アメリカにおける現代エイジング「問題」”<安川悦子, *op. cit.,* 2002> p. 117–120.

33 Rowe, John W. and Kahn, Robert L. “*Human Aging: Usual and Successful*” *Science*, vol. 237, 1987, p. 143–149.
Rowe, John W. and Kahn, Robert L. “*Successful Aging*” *The Gerontologist*, vol. 37, 1997, p. 433–440.

34 Butler, Robert N. “*Productive Aging*” in Fillit, Howard M. ed., *op. cit.,* 2010, p. 193–197.

35 Hooyman, Nancy. “*Social Theories of Aging*” in Hooyman, Nancy ed., *op. cit.,* 2010.

36 小倉康嗣『高齢化社会と日本人の生き方—岐路に立つ現代中年のライフストーリー』慶應義塾大学出版会, 2006.

37 天田城介『〈老い衰えゆくこと〉の社会学〔増補改訂版〕』多賀出版, 2010.

38 『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』は著作を,「〈老い衰えゆくこと〉の社会学」は著作で提示・実践した方法論を指す。

39 天田城介, *op. cit.,* 2010, p. 3.

40 *Ibid.*, p. 484–495.

41 *Ibid.*, p. 84–105.

42 *Ibid.*, p. 464–479.

43 *Ibid.*, p. 11.

44 *Ibid.*, p. 12–14.

45 *Ibid.*, p. 534–545.

46 *Ibid.*, p. 483–495.

47 *Ibid.*, p. 11.

48 *Ibid.*, p. 12–14.

A Study on Educational Gerontology in Japan

Nanako MATSUMOTO[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

This study aims to conceptualize an alternative vision for "educational gerontology" in Japan by constructing a theoretical framework for the youth to learn about the aged and aging. In order to achieve this purpose, this paper firstly organizes theories of educational gerontology in Japan and indicates the challenges in the field of "education about aging (EAA)" for the youth. Secondarily, it examines the field of social gerontology and overviews the theory formation against ageism. Lastly, it raises means in which the youth can study the aged and aging in the field of "care" in reference to Amada's theory of critical gerontology. To advance this study; 1. theoretical and empirical examination of the relationship between the field of "care" and the youth, and 2. empirical examination of EAA practices are required for the future studies.

Keywords: Social Gerontology, Educational Gerontology, Lifelong Learning, Aging, Ageism